

2019/08/18

「愛に支えられている」

■人の土台は神である

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:20）

神は、人をご自分の外側に造ったのではなく、ご自分を土台にして造られました。つまり、私たちは神の一部として造られたのです。このことは、神と人との関係において、非常に重要な意味を持っています。

もし、人が神の外側に造られているのであれば、人が神の言うことをきかない時、神は人に罰を与えて悔い改めたら赦すという接し方ができます。しかし、自分の一部がいうことをきかないのであれば、話は別です。たとえば、あなたの体の一部が自分の思い通りに動かなくなったら、あなたはどうするでしょうか。何か病気になったのだと考えて、なんとか癒そうとすることでしょう。

神も同じです。イエス・キリストは、罪人に対して、ダメな者だから自分と切り離そうとしたことは、一度もありません。常に病人を癒そうという態度で接しておられます。そして、ついには、言うことをきかなくなった体を癒すために、十字架に架かられたのです。

私たちは、神の体の一部です。体というものは、様々な器官が血管によって一つにつながり、互いに関わりを持ちながら動いています。そして、神と私たちは愛によってつながっています。神の体の器官同士をつなぐ血管は、愛なのです。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:38-39）

私たちと神を結びつけている神の愛は、非常に強力で、どんなものも引き離すことができません。愛は神から生まれています。私たちの土台である神から、愛が泉のように湧き出でて、あふれ流れ、その愛は人へと向かっていきます。愛とは同質のものを結び付けるものです。ですから、私たちの中からあふれた愛は、神のいのちで造られている人へと向かっていくのです。人が人と関わろうとするのはそのためです。人の土台が神であり、神は愛であるがゆえに、そこから流れ出る愛が、同質である人と人とを結びつける働きをするため、人はどうしても人と関わろうとしてしまうのです。

■神と人との対立

人の土台は神です。ですから、人は神と同質のものであり、すべての人の内に愛が存在しています。その愛が、神と人・人と人という同質なもの同士を結び付ける働きをしています。しかし、それだけでは、親密な関わりに至ることはできません。親密な関わりを持つためには、同質の詳細な基準が同じであることが必要です。それは裏を返すと、大枠が同質によって結びついていても、詳細な基準が異なると、様々なトラブルが生じるということなのです。そして、神と人ではその同質の基準が相当異なってしまっています。

人にとっての同質の基準とは何でしょうか。人は、人間の土台である神が見えないため、人間は神と離れた存在だと思っています。それは、悪魔が蛇を使ってアダムとエバを欺いたことによって、罪が入り込み、死が入り込んで、神との関係が失われたからです。この時、人の肉の目は開かれ、霊なるものが見えなくなり、有限のものしか目に入らなくなったのです。また、同時に、人は永遠なる神との結びつきを失って、朽ちるものとなりました。これが、聖書が教える死です。死が入り込んだ結果、人は、土台である神が見えず、裸である自分、朽ちる自分しか見えなくなり、自分の価値がわからなくなりました。有限のものしか見えなくなった人間が自分の価値を判断する方法は、うわべしかありません。こうして人は、互いのうわべを比べて自分は何者なのかを知ろうとし、うわべを良くすることによって、自分の価値を引き上げようとするようになりました。自分を飾ったり、学歴や富や人の評判で、自分の価値を上げようとするようになったのです。しかし、人はみな必ず滅びる存在です。いくら努力を重ねても、それらはすべて消え去ります。その結果、結局人はみな無価値でダメな者であるという結論に達するようになったのです。これが人の同質の基準です。

では、神における同質の基準は何でしょうか。神は、絶対的な価値のある良きものです。これ以外の基準はありません。そして、神にとっては、人もまったく同じ基準です。ご自分を土台としている人間は、神にとっては、神と同じように高価で尊く良きものなのです。だからこそ、イエス・キリストご自身が十字架に架かられたのです。

しかし、ここに神と人との対立が生まれます。

自分の土台が見えない人間は、自分が神と同質であるとは、とても受け入れられません。人間は無価値でダメなものだと認識しているために、自分と同質なものと結びつこうとして、高価で尊い神とは親密に結びつくことができないのです。こうして、人はイエス・キリストの十字架を拒否しました。無価値でダメな自分が無条件で愛されるなどあり得ない、もっと頑張って価値を上げなければ愛されるはずがないと思いついて入っているのです。

人が偶像で神を作ったのも、ここに理由があります。無価値で滅びるものと結びつこうとする人間は、自分と同質な神を作り、それで平和を作ろうとしたのです。人が作った神は、認められるべき良い行いをすれば受け入れてくれるという神です。

■人間関係のトラブル

このように、神と人は同質でありながらも、その基準が異なるために、親密な関係を築こうとするとトラブルが生じます。では、人と人との関係はどうでしょうか。無価値でダメな

もの同士であれば、親密な関係が築けるのでしょうか。そうとは限らないのです。人は、人との比較によって自分の価値をはかろうとして生きています。この時、詳細な基準の違いを発見すると、密な関わりをするために、お互いの価値を均質にしようとする働きが生まれます。これが、人間関係のトラブルを生み出すのです。

例えば、自分よりもうわべの価値が高い人と関わると、私たちは嫉妬し、相手を引き下げようとしています。相手をさばくのは、自分と同じレベルに引き下げようとする行為です。ケンカすることも、裁き合い、引き下げ合っ、自分と相手と同じレベルにしようとする行為です。それは、相手と同じレベルになって、密な関わりをするを求めているからなのです。

また、自分よりもダメだと思ふ相手に対しては、自慢し、誇ることで、自分の価値を引き下げて、密な関わりを持とうとしています。人からの称賛を求めるということは、自分をその相手のレベルに引き下げる行為なのです。なぜなら、私たちが誇っているものは、すべて衰えて消滅するものばかりです。その価値のないものを誇るとは、私はこんなに価値のないものを持っているのだと、自分の無価値さを誇っていることになるのです。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」(マタイ 6:29)

花に帽子をかぶせたり、豪華な服を着せたりしたら、花の価値は上がるのでしょうか。それは、まったく滑稽なことです。私たちは自分を飾り立て自慢することによって、自分を引き下げているのです。反対に、ことさらに自己卑下することも自分を引き下げる行為です。

人が人を受け入れることができるのは、自分と相手と同じレベルにあると思うときです。これを、この世では、友情・友愛・家族愛などと呼びます。ただし、このレベルが一致するのもひと時であって、私たちはすぐにお互いの能力の差に気づき始め、さばいたり、自慢したり、自己卑下をしたりという、調整を始めるものです。

このように、裁いたり自慢したり自己卑下をしたりするのは、関わりを持ちたいことの現われです。なぜなら、私たちの土台である神から愛があふれているために、人は同質のものに向かわずにはいられないのです。しかし、同質のものに向かって関わりを持とうとすると、多かれ少なかれ、必ず人間関係のトラブルが生じるというジレンマが発生します。そのことに疲れて、人ではなく物質を愛し、物質と結びついて生きようとする人たちも中には現れますが、人格がないものとの関わりは、肉を満足させることはできても心を満足させることはできません。

この問題をどのように解決すればよいのでしょうか。問題の本質は、人の土台である神からあふれている愛によって、同質のものに向かおうとする私たちが、死によって、人は無価値でダメなものだという基準に変わってしまったことにあります。そのために、神に対しても人に対しても、結びつこうとすればするほど、小さな差異につまづき、裁いたり、誇ったり、自己卑下をしたり、自分と相手と同じレベルにしようとして引き下げあってしまうのです。ですから、同質の基準を正しい基準に戻せば、この問題を解決することができます。

■隔ての壁を打ち壊す

私たちの内からあふれ出た愛の流れは、本来、神と人・人と人が正しく結びつくものとなるはずでした。ところが、死によってその流れが変わったために、今ではかえって隔ての壁となってしまっています。つまり、人の同質の基準が変わったために、同質のもの同士を結び付ける流れがかえって様々なトラブルを引き起こしてしまっているのです。そのトラブルのそもそもの原因である同質の基準を、元に戻すにはどうすればよいのでしょうか。どうすれば、隔ての壁を打ち壊すことができるのでしょうか。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」(エペソ 2:14-16)

人は、人と関わる時、裁いたり、怒ったり、嫉妬したり、自慢したりして、レベルを調整して相手と同質になり親密になろうとしています。しかし、この関わり方は自分自身をつらくさせます。だからといって、物に逃げ、その関わりを物に向けても、物には人格がないので、肉が喜ぶだけで心は全く満足が得られません。このつらさが増し加わり、心が耐えられなくなった時、「神様助けて」とギブアップすることができれば幸いです。「私には愛せない」「素直に愛することも、愛を受け取ることもできない」「このつらさからどうぞ助けてください」と、神に向かってギブアップするなら、あなたに伸ばされている神の御手が見えてきます。神は、あなたの手を握り、あなたを引き上げてくださいます。神に助けを求めるとは、その主の御手をつかむことができたということです。

「神様、こんな罪人の私をあわれんでください」と宮で祈っていた取税人のように、「罪人の私をあわれんでください」と祈るなら、イエス様の十字架が見えてくるようになります。「私はあなたの罪を裁かない。あなたを愛している。何も心配しなくていい」というイエス様の愛を受け取ることができるようになるのです。神に向かってギブアップし、主の御手をつかみ、イエス・キリストの愛を受け取ると、人は自分が良きものであることに少しずつ気づいていきます。神は、あなたがどんな罪を犯しても、あなたがどんなに自分の弱さや醜さを告白しても、絶対にあなたをさばきません。ですから、どんなことでも、本気で祈るなら、神はあなたを愛しているという十字架が見えるようになり、私たちの心を覆っていた覆いを取り除けられ、「自分はダメなものではない。良きものなのだ」と信じることができるようになり、平安が与えられるのです。こうして、新しい同質の基準が生まれ、真に十字架は私のものという神の愛をそのまま受け取ることができるようになると、まわりの人のこともそのまま愛せるようになります。「人はみな良き者である」と受け入れられるようになるので、人とのレベル調整がいらなくなるのです。こうして、神の愛は正しい流れを取り戻します。

まさに私たちの敵意の壁を壊してくれるのが、十字架なのです。イエス・キリストが十字

架に架かられたのは、あなたは良き者であり、素晴らしい者であることを、私たちに知らせるためです。こうしてキリストは、もともと一つでありながら、二つに分かれていたものを、再び一つにしてくださいました。これが神の福音です。私たちの苦しみの解決は、あなたが十字架を見上げて、「自分は神に愛される良きものであった」と知ることにあります。

私たちは、神に背負われている自分が見えていませんでしたが、信仰でそれがわかるようになります。パウロはこのことを知って、「私ではなく、キリストが私のうちに生きておられる」と言ったのです。このことに気づく時、神の愛は正しい流れを取り戻します。人があなたを裁いたり妬んだりしても、それはあなたと結びつくために、あなたを自分と同じレベルにしようとしているだけです。ですから、問題の解決は、人を変えることではなく、自分のメガネを変えることです。それを変えてくれるのは、十字架だけです。十字架が、隔ての壁となっていた人の同質の基準を打ち壊し、私たちを神と一つにします。このことに気づくとき、愛は正しい流れを取り戻すのです。